



震災文庫 11 - 273

宝塚

序

「震度7」この激震が宝塚の街を襲うなど、誰もが予想だにしなかった衝撃でありました。平成7年（1995年）1月17日午前5時46分の出来事です。

倒壊した家屋や電柱、舗装のまくれた道路と噴き出している水、ガスの臭気の漂う街をやっとの思いで出勤した職員も何から手をつけて良いのか、状況判断の不十分ななかで、私たちは何をしたのか？ また、何が出来て、何が出来なかったのか？ 記憶が薄れないうちにまとめたいと計画しつつも時が過ぎ、本年1月の被災1年を経て、ようやく整理の緒についてというのが実情であります。

いざ取りかかってみますと、あれこれと取捨に迷い、重複の無駄など、徒らに時を費やし、秋に至りようやくまとめることが出来ました。

顧みますと、日頃は各地での総会などを通じてお付き合いを頂いておりました日本水道協会に加盟する事業体の皆様の連携の強さと心意気に支えられ、この危機を乗り越えることが出来たものと感謝いたしております。

被災市の一員として一応の復旧を終えた今、感じていますことは、水道事業を取巻く現在の経営環境のもとでは、一事業体のみで今回の災害を予測した常備体制を取ることは、極めて困難なことであると言うことであります。出来得るならば、想定する災害に対応した必要種別毎の応援体制を、広域的に、また近隣毎に整え、応分の負担を相互に持てる合意を形成することが急務であろうと考えます。

今回の兵庫県南部地震に際しまして、物心両面のご支援をくださった水道事業体や関係事業体の皆様にはお礼に併せまして被災の実情や復旧の状況をご報告申し上げるべきでありましたが、延び延びとなり今日に至りました。お詫びを兼ねまして小誌をお届けするようになってしまいましたがお容赦くださいますようお願い申し上げます。

皆様から寄せられました激励も、助言も、苦言も、私たちの反省と将来への礎として収めさせていただきます。また、この記録はご支援いただいたことへの感謝の気持ちを、私たちの事業体が存続する限り、後々まで伝えたいとの願いも込め、そしてこのような災害はあってはならないとではありますが、何時か、何処かで起こらないとは限りません。その際には幾許かのお返しをする心構えを持ちつづけたいと念じながら作成いたしました。

平成8年（1996年）9月30日

宝塚市水道事業管理者

樋口 健